

漢文〈四〉

漢文を読む

漢詩

今回の学習のポイント

- ① 「漢詩」とは
- ② 「漢詩」を読む

「漢詩」とは

高校で学ぶ漢詩は、近体詩です。近体詩とは、唐の時代(六一八〜九〇七)にできた新しい形式の詩です。それ以前の詩は古体詩(古詩)と呼ばれています。近体詩は、古体詩に比べて、句数・構成・対句・押韻などにきまりがあります。古いものを好む中国人は古体詩を軽んじたわけではありませんが、詩にきまりを設けることで緊密な構成と音やリズムの美しさを作り出そうとしました。

● 漢詩の形式(詩形)

漢詩は、一首、二首と数えます。近体詩の中で、一首が四句(四行)から成るものを「絶句」、八句(八行)から成るものを「律詩」といいます。さらに、一句(一行)が五言(五字)から成るものを「五言絶句」、「五言律詩」といい、七言(七字)から成るものを「七言絶句」、「七言律詩」といいます。これが漢詩の形式(詩形)です。

絶句では、第一句を起句(うたい起こしの句)、第二句を承句(起句をそのまま承けて展開させる句)、第三句を転句(起句・承句を転じる句)、第四句を結句(全体を結ぶ句)と呼んでいます。この絶句の構成法「起承転結」は、私たちの文章にも用いられるようになりました。次に、律詩では、第一・二句を首聯、第三・四句を頷聯、第五・六句を頸聯、第七・八句を尾聯と呼んでいます。

【発展1】

次の漢詩は、孟浩然という詩人の「春暁」です。漢詩の形式(詩形)を答えてみましょう。

【参考・書き下し文】

春 眠 不 覚 曉
春眠を覚えず

処 処 聞 啼 鳥
处处啼鳥を聞く

夜 来 風 雨 声
夜来風雨の声

花 落 知 多 少
花落つること知る多少

()

ヒント

「絶句」と「律詩」を確認しましょう。

国語監修・執筆

古宮才由里

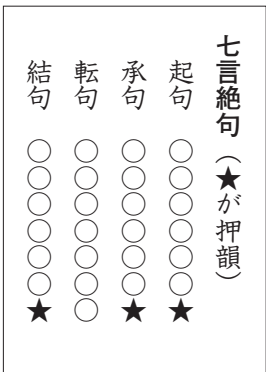
■押韻と対句

番組では、サイプレス上野さんが、軽妙なラップ音楽で「韻を踏むこと」や「ダブルミーニング」について話してくれます。韻を踏むことで耳に響きの良い「音」や「律（リズム）」が作り出されます。また、言葉を意図的に対比させることで意味がわかりやすく、グッと印象が深まるように感じられます。

さて、漢詩にも韻を踏んだり（押韻）、対句を用いたりするきまりがあります。これらは、漢詩の形式により異なります。番組で取り上げる李白の「静夜思」（次ページ）を例に、次に示す内容を確認しましょう。

●押韻は句末に、音読みで同じ響きの字を配置すること。

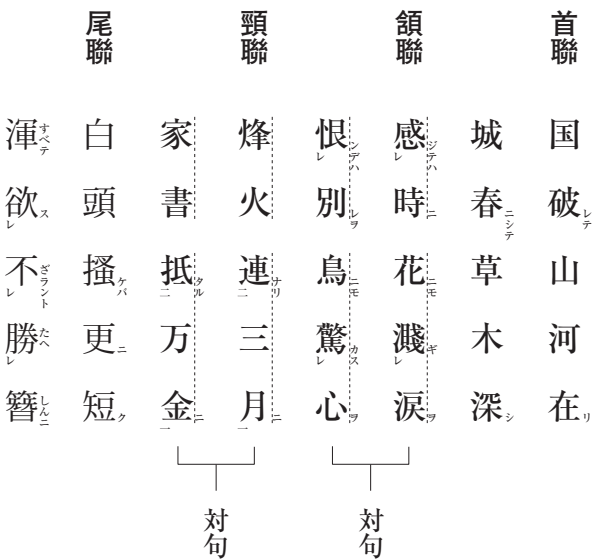
五言の漢詩は偶数句末、七言の漢詩は第一句末と偶数句末に置く。



●対句は字数が同じで、意味上関連の深い語句を並べて表現すること。

律詩のみ、頷聯、頸聯に對句を置く。

五言律詩（「春望」杜甫）



【発展2】

【発展1】であつかった「春暁」で押韻が見られるのは第何句か、すべて挙げましょう。

また、その漢字と読みをそれぞれ書き出してみましょう。

「漢詩」を読む

左は、番組で紹介する、盛唐の詩人李白（七〇一〜七六二）の漢詩です。李白は裕福な家庭に生まれ、自由奔放でおおらかな性格だったと言われています。絶句に優れ、「詩仙」と呼ばれました。

静夜思

李白

牀前看月光
疑是地上霜
舉頭望山月
低頭思故郷

〈書き下し文〉

静夜思

牀前月光を看る

疑ふらくは是れ地上の霜かと

頭を挙げて山月を望み

頭を低れて故郷を思ふ

〈現代語訳〉

静かな夜の思ひ

寢床の前に明るく差し込む月の光が、

地上に降りた霜のように見えた。

頭を上げて、山の端に昇っている月を見上げたが、

いつの間にかうなだれて、遠い故郷に思いを馳せていた。

中国には、月を見ることによって遠く離れた別の場所を思うという発想があります。この「静夜思」も、李白が月を見ることによって、その月が同じように照らしている遠い故郷を思うものです。故郷を思う気持ちのことを「望郷の念」といい、「望郷」は漢詩のテーマの一つでした。この詩には、周囲が寝静まって物音一つしない静寂な夜に、たったひとり眠れずに物思いにふける詩人の姿が描かれています。明るく白く、柔らかに差し込む月の光は、いつか故郷で見た霜のように見え、自然に詩人の気持ちや友人に對する思ひへと誘う役割を果たしています。確かに悲しみは感じられますが、痛々しい悲しみではありません。月の光のように清らかで美しいもののように感じられます。



